

●「赤心」継がん

Dream

五代塾 Sinbun (新聞)

Godaijuku

第 32 号

発行: Dream 五代塾

吹田市千里山西 5-14-17

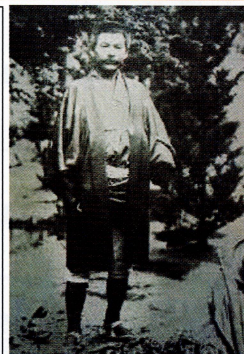
発行責任者: 理事長 川口 建

「鹿児島検定公式テキストブック」

このテキストブックには、五代友厚のページはないが、「日本の資本主義を育てた人々」の項に、五代友厚と松方正義がつぎのように紹介されている。

—1865 年 3 月、串木野の羽島沖に、一隻の汽船が姿を現わしました。五代友厚等に乗せ総勢 19 名の留学生が、イギリスに留学しました。五代友厚が、近代的な商業知識を身に付け主に大阪で、活躍した背景には、ヨーロッパで学んだ事が、十分生かされています。松方正義は、鹿児島市の下荒田で生まれました。幼い頃から勉学に励み、両親を亡くしながらも苦勞し、大蔵省の官僚になりました。1881 年、大蔵卿に就任した松方正義は、1882 年、我国初めての中央銀行を作り、国民の銀行に対する信用を高める政策を打出しました。又、1926 年、総理大臣となり金本位制度を確立し、日本の資本主義を、ますます発展させる事となりました。—

五代友厚の处世術、経済論に大きく感銘を受け、五代友厚への追悼歌「時くれば赤き心もあらはれて 惜しまれて散る紅葉(もみぢ)なるらん」を寄せた前田正名が「日本の地域産業の基礎を築いた前田正名」の項で紹介されている。



地方産業振興のため、草履 脚絆姿で全国行脚

Dream 五代塾顧問 上村 修三
(五代友厚顕彰会世話人)

五代友厚の遺志を継いだ
前田正名

前田正名【まえだまさな】

(1850・1921)

指宿市山川の漢方医の六男に生まれ、幼少期は鹿児島市小川町の知人宅に住み込んで勉強、14 歳で藩の開成所、15 歳から 18 歳までは長崎の語学塾に藩費留学、長崎でイギリスより帰国した五代友厚に出会う。この語学塾では、陸奥宗光と机を並べた。薩摩藩英国留学生のメンバーからは漏れた前田は、洋行を諦めず、戊辰戦争の最中、上海に渡り、1868 年に高橋新吉、兄の前田献吉と「薩摩辞書」と呼ばれる『和訳英辞書』をつくった。その辞書販売では五代が支援した。その辞書の売り上げで、1869 年、20 歳の時にフランス総領事モンブラン伯爵の随行者として私費で渡仏。

離れ、宮崎県都城の開田事業や北海道釧路の製糸事業に取り組み、都城や鹿児島県根占、福岡、大分、兵庫等にその土地の名を冠した「〇〇一步園」という農場を開設して、地域農業の振興に努めた。

この「一步園」の名は、前田が座右の銘とした「物ごと万事一歩が大切」に由来し、生糸・茶・織物などの輸出産業を中心に在来産業の振興を奨励した訪問先で、前田は「今日の急務は国是、県是、郡是、村是を定むるにあり」と所信を述べた。前田の所信が地方産業の担い手たちを大いに発奮させ、町村是(農村計画・地域計画)運動の潮流となり、京都府何鹿郡(現京都府綾部市)の発展のためには、農家に養蚕を奨励することが「郡是(郡の急務)」であると考え、地域産業である蚕糸業の振興を目的とする「郡是製糸(現グンゼ)」を設立し、日本を代表する総合繊維メーカー「グンゼ」として発展していった。



前田正名は兵庫では、「オリーブ園」、「葡萄園」開設に関わり、湊川神社には、日本最古のオリーブの木がある

翌年から官費留学生としてフランス公使館二等書記生として活動。その間、フランスの産業や農業政策を研究し、滞在中に普法戦争(1870-1871)を体験、負けたフランスが農業を保護、貿易を行い再興していく姿を見て、日本へ応用しようとした。1877 年に帰国し、内務省や大蔵省で殖産興業政策の推進に貢献。帰国に際して果樹・野菜・花の種田 1,000 種以上を持ち帰り、三田育種場長を務めた。内務・大蔵・農商務の各省に勤務し、山梨県知事にも就任。また、産業興しに関する膨大な意見書を作成するなど、地域産業の振興に努めたが、重工業を重視する政府の中枢と対立、農商務次官を 40 歳で退官。

殖産興業のための報告書

『興業意見』

その後一時、貴族院の勅選議員に就くが、71 才で亡くなるまで、なりふり構わず国内外をかけ回り、農業や地域産業の振興に力の限り奮闘。茶業会、マッチ業会、木ろう業会、蚕糸業会、獣医会、酒造業会、貿易協会や五一会(織物・陶器・銅器・漆器・製紙と後で加わった彫刻・数物)などの組織を創設。大日本商工会を結成して、44 歳で初代会頭に就任。47 歳、單身渡米して、大統領や上・下院議員と会話し、関税の軽減を図った。48 歳、すべての公職を

1881 年、前田は大蔵省ならびに農商務省の大書記官に就任し、1884 年には国内産業の実情を調査して、殖産興業のための報告書『興業意見』全三〇巻を編纂した。松方財政による不況下の各産業界の現況と、資本供給、法規整備、地方産業の優先的近代化、政府保護の必要性などの政策をまとめたものであった。松方のデフレ政策による農村や地方産業が深刻な不況からの脱却には、前田は地方

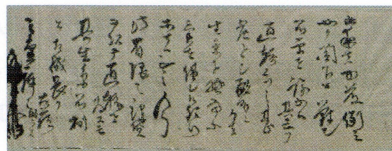
の「実力」を重視し、在来産業を保護・育成することで国力を回復させようと考えた。この前田の考え方が、当時の地方産業切り捨て、軍備拡張、政商資本に手厚い保護政策をとる松方財政グループと対立し、この抗争に敗れた前田は一時非職となった。『興業意見』と松方財政の考え方の比較は次の図表通りである。

	『興業意見』	松方財政
財 政	興業貸付けによる資本供給	不換紙幣の回収・消却、紙幣流通量の削減、高騰物価を抑制
歳 出	地方産業の優先的近代化、政府保護のための歳出	軍事費を除く政府予算を大幅に削り、財政の黒字化
金 融	『興業銀行』の設置など、政府が産業へ直接的な融資・投資を行う。勧業銀行や農工銀行の設置	通貨発行権を一本化し、金融システム安定化のため1882年、日本銀行設立。1885年銀貨と交換可能な「日本銀行券（兌換銀行券）」を発行し近代的で信頼性の高い通貨制度を確立
産 業	生糸・茶など地方の在来産業（農業・農工業）の育成と生産者団結による輸出拡大を重視。生産者の団結、農業試験場の設立による品種改良	莫大な赤字を出していた官営模範工場を、三井や三菱等に非常に安い価格で払い下げた。軍備・戦略産業（鉄道、海運など）の充実を優先

生糸荷預所事件

大蔵・農商務官僚であった前田は、外国商館が主導権を握っていた当時の貿易構造（買いたたきや一方的な検査慣行）を打破し、日本人が自ら輸出を行う「商権回復」を強く主張し、前田の主張に同調して、1881年、横浜の生糸売込問屋（茂木惣兵衛、原善三郎ら）が取引改善を目指して「連合生糸荷預所」を設立した。外国商人はこれに猛反発し、生糸の買入れを拒否する「不買同盟」で対抗し、横浜で

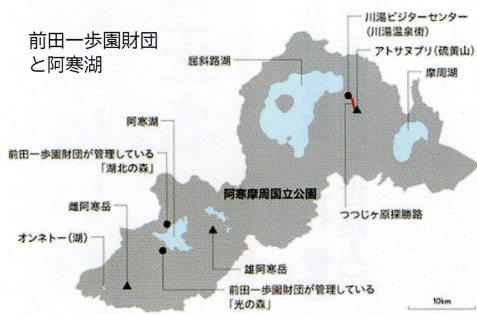
の生糸取引が約2ヶ月間停止する事態となるが、前田を含む政府関係者は、横浜正金銀行を通じて荷預所に多額の融資を行い、資金面でもバックアップ。最終的には渋沢栄一らの仲裁により、条件付きで荷預所が解散する形で和解。この事件は、単なるビジネス上の諸外国との紛争ではなく、前田正名らが掲げた「官民一体となった商権回復運動」の象徴的な出来事として歴史に刻まれた。当時、五代友厚は、直輸出により外国商人の中間搾取を排除したい前田に「生糸の直輸出に関連して、反対派の官僚が新任の大蔵卿松方正義を説得するかもしれない可能性がある」と助言している。この書簡から北海道開拓使官有物下り事件最中に五代が前田の直輸出政策のために陰で働いていたことが見て取れる。



前田正名への五代友厚書簡

前田一步園財団

1906年、前田が国から阿寒湖畔の未開地の払い下げを受け、牧場を開いた。当初は開発を目的としていたが、阿寒の豊かな自然に感銘を受け、晩年には「この山は、伐る山から観る山にすべきである」と、資源利用から自然保護へと方針を大きく転換した。前田は、家訓「前田家の財産はすべて公共の財産となす」、遺訓「後の世の春をたのみて植えおとし人の心の桜をぞみる」



を残し、その精神は二代目園主・正次、そしてその妻である光子へと受け継がれ、現在の財団法人設立へと繋がっている。約3,600ヘクタールに及ぶ「復元森」の維持管理や環境保全活動を行っており、前田記念館 一步荘には、前田光子が居住していた住宅と庭園が保存され、「自然と文化を学ぶ場」としても活用されている。

後年の前田は五代友厚の富国持論「米・生糸・茶・木材・海産物等輸出し、海外留学生派遣・技術者招聘・諸産業機械、軍艦、鉄砲輸入する。」に多大な影響を受けたといわれている。



前田記念館 一步荘

最後に前田の五代友厚評価を紹介する。

― 若し五代にして少しく商業家の心意義あらば、今頃は我が国唯一の大財産家となりて、今日借財に倒れるが如き事なかりしならむ。而して之れ懸（やが）て五代の五代たる所以（ゆえん）也。―（『自叙伝』）

参考資料
・祖父修『前田正名』吉川弘文館、1973年
・前田正名『興業意見・所見他』農山漁村文化協会、1976年

地域振興「まず是从」



朝日新聞 2016-07-27

五代友厚も立ち寄った 外會祖父永見の家（中の四）

Dream 五代塾顧問 曾野 豪夫

明治初期の大坂

幕末維新期の大坂は衰微した。幕府による元治元年と慶応二年の二度にわたる長州征伐の後、同四年一月三日に始まった鳥羽伏見の戦いは戊辰戦争として翌二年五月の五稜郭の戦いで終息した。その間、新政府は明治二年五月に太政官（政府）を東京に移した。一方、五代は商都大阪の復興を担うべく七月に官を辞し、横浜から大阪に戻った。

金銀分析所

一〇月、金銀分析所を設立。長崎以来の子分の永見米吉郎（筆者の外會祖父もその設立に協力した。五代の執事（秘書、事業の実務担当者）としては長崎軍団と称される人が多かった。特に有名なのが堀孝之と岩瀬公國である。二人は元長崎阿蘭陀語通辞で代々豪商の永見家とは親密な往来関係にあった。幕末に五代は欧州視察旅行に堀を、また上海出張には岩瀬を伴っていた。そして共に海外視察を行った二人を五代は維新後の早い時期に大阪に呼び寄せた。

堂島米会所の復活

享保十五年（一七三〇）以来「天下の台所」と称された堂島の米（こめ）会所は、全国からお米が集められて現物と先物取引により必要量が各藩に回漕されていた。堂島は世界で初めての先物市場でもあった。各藩は百姓から米の現物を税として収納し、堂島の市場で売買して必要量を必要限月に買い戻した上で自藩の武士の俸給として現物支給をしていたのである。しかし幕末の混乱期に機能せず国内

経済は疲弊していた。明治新政府が二年に京都から東京に移り、すぐに先物取引を禁止した。(筆者の感想・新政府高官の薩長土肥の元武士は相場を知らなかった?)そのため堂島の米商人数百人が職を失い、一四〇年間機能していた米取引が正常に機能しない状態が続いた。そこで大阪の地元有力者は新政府に米取引所の再開を陳情し、ようやく四年に再興された。



堂島米市の広重図
(大阪府立中之島図書館所蔵)

明治九年、「堂島米商会所」として五代らの尽力により組織や運営機能が更に強化され再出発するに際して、三井組銀行部の三井元之助は有能な部下兼松房治郎を肝煎として送り込んだ。(本紙第十六号参照)

弘成館の出納大課長 永見米吉郎

三年天和銅山を初め数ヶ所の銅山開発に五代は乗り出した。後年鉱山王と言われるようになる最初の事業である。その後多くの鉱山開発事業を組織的に運営するために六年、弘成館を大阪と東京に設立し事業の本拠とした。館の規則は驚くほど多岐詳細に亘っている。江戸時代の幕府や各藩の官僚組織の基礎があったからだろう。

永見米吉郎ももちろん創業に関わり、三十四歳にして初代の「出納(すいと)大課長」の役職に就いた。明治時代は企業に部長の役職はなかったと思う。従い大課長のポストは館の莫大な資金運用をも担う立場で、五代館長と直結のポストだったのだろう。米吉郎が地方の鉱山に出張した時の書簡や報告書も残っている。(『五代友厚伝記資料』第一巻)

四年に外曾祖父米吉郎は淀屋橋南西の旧吉田藩邸(土地約五三〇坪、建坪約八十六坪、二階約五〇坪)を購入して自邸兼永見商店の本

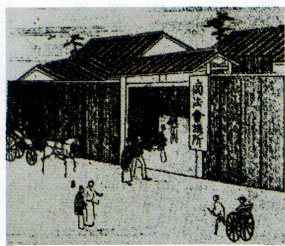
拠とし、更に五代が次々と興す新事業の内輪の打ち合わせの場として活用した。

「大立銀鉱山」と鉱長宮地長夫

七年、弘成館は半田銀山、大立(おおたて)銀山等約一〇ヶ所の鉱山を開鉱した。大立銀山は旧播磨国、現兵庫県の中央西部にある。播磨の酒井藩は三河以来代々徳川家譜代の家臣の家柄だったため、幕末に徳川に殉じ、藩士の多くが維新後苦勞をした。その中に代々三五〇石前後の禄を食んでいた宮地家一七代の長夫がいた。維新後に五代との縁ができて弘成館の幹部となり、同県安楽(しそく)郡大立銀山の鉱長を任された。そこで生まれた綾はのちに閉山後大阪に住むようになり、筆者の外曾祖父永見米吉郎の一人息子省一と結婚した。五代との縁によるものである。その次男である筆者の外伯父永見長世が宮地家の養子となつて同家を継ぎ、更にその息子亀三(筆者の従弟)は当塾の会員である。(系図は本紙第二十九号三頁参照)

大阪商法会議所と兼松房治郎

十年、大阪商法会議所が設立され五代が会頭に推挙された時に、五代は兼松を初代肝煎とした。会議所には明治政府や東京商法会議所から膨大な調査や資料請求がなされたが、多くは兼松が実務を担当して報告書等を作成したものと思っている。



当初の大阪商法会議所

以下その後の兼松の足跡につき触れたい。兼松は十七年大阪商船創立取締役営業部長、二十年大阪日報を買収して翌二十一年大阪毎日新聞社と改題して初代社長に就任した。大阪の実業界のために官界政界を背景とせず、

日々の紙面に物価表を掲載した。その頃の日本の輸出入取引は日本の開港地横浜、神戸、長崎、新潟、札幌の五港にある欧米の商館貿易によるものが殆どだった。日本の商人が欧米の商館を頭(ず)を低くして訪れて辯髪(べんぱつ)の清国人の通弁と輸出入交渉をするのである。通弁とは通訳のことだが、中小の商談では目の青い館長等には会わせて貰えなかった。それどころか日本人商人は通用門を通らされるが多かった、らしい。通弁には手数料の余得があるとのことだった。

兼松は明治元年二十三歳の頃から三年にかけて横浜、神戸、新潟、横浜で外国商館へ商品売込みをしていた経験があった。又横浜ではヘボン牧師夫妻の同僚のバラフ牧師夫人に口の中に指を突つ込まれて英語を習ったこともあった。四年には横浜外国語学校に入校して英語を学んだ。外国人は怖くない。兼松は明治二〇年四十二歳にして私費で半年間に亘つてシドニーとメルボルン視察旅行を行った。濠洲訛りには悩まされたことだろう。兼松はオーストラリアから輸入する羊毛を商館貿易ではなく、国益のために日本人の手で直接輸入することを決意した。中之島の自邸や倉庫の建つ一、八〇〇余坪の土地他全財産を現金に換えて「日濠貿易兼松房治郎商店」を神戸に創業した。「兼松君、狂せり」と友人は嘆じた。その後老境の四半世紀の波乱万丈の歴史は割愛する。兼松は第一次世界大戦の勃発する前年大正二年に亡くなった。享年六十八。

第一次欧州大戦勃発直前の日本の羊毛輸入商社は兼松商店、大倉商事、三井物産、高島屋飯田の四社のみだった。そして開戦直前四年間の競売での兼松の取り扱いシェアは、なんと、61.9%、52.9%、66.5%、49.7%、57.7%だった。兼松は満足して旅立ったことと思うし、もし五代が生存していたらまだ八〇歳に届かない年齢だったので大変喜んだことと思う。

現在の兼松(株)である。同社は近年の商社合併に参画しなかったが社名は残つて一四〇年近く活動を続けている。本稿で触れるのは私事ながら父曾野近一(取締役、海軍軍属としてスルー海で戦死、享年四十四)、筆者(最後の海外ポストは北京駐在員事務所長)、娘早映子と三代にわたって同社に勤めたからでもある。(本紙第十六、十七と十九号参照)

大阪株式取引所と永見米吉郎

十一年、大阪株式取引所の設立に際して米吉郎は大阪の財界人の間を走り回り、取引所設立と共に肝煎(きもいり、現在の専務理事か)に就任して運営に心を砕いた。創立株主名簿によると五代友厚、鴻池善右衛門、三井元之助、平瀬亀之助、住友吉左衛門、笠野熊吉(以上各一万五千円)、井口新三郎、熊谷辰太郎(各一万円)、山口吉郎兵衛、加納治郎衛門(各九千五百円)、中山信彬(初代頭取五千円)、西村席四郎、永見米吉郎(各四千円)、廣瀬宰平(三千円)となっている。以下一六名分は省略。永見は新頭取となる中山の五〇株に遠慮して四〇株であり、現在の価値にして四千万円位だろうか。(本紙第八号参照)



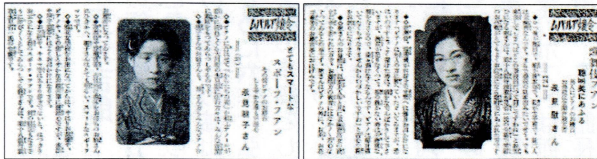
株式取引所設立趣意書
五代友厚 明治11年(1878)

米吉郎はしかし、新設したばかりの大阪の永見商店の物品の交易と金融業の営業基盤の確立に多忙だった。金融業は明治一〇年、兄傳三郎が初代頭取となつた長崎の第十八国立銀行の大阪代理店業務で、明治二十六年に銀行法の改定に伴い大阪支店となった。長崎と大阪の永見商店は朝鮮半島との交易とそれに伴う金融業務も大きな柱の一つだった。大阪支店は戦前戦後地元では通称「永見銀行」と呼ばれ、大阪生れの外祖父永見省一は入行当初に長崎本店と朝鮮の京城支店勤務を経

験したが、その後は大阪支店以外に勤務したことはなかった。何しろ一〇人の子福者(他に二名夭折)、姉に迎えた養子も一四人の子持ちで極く近所に住んでいたので大阪勤務から離れられなかったのである。(筆者の父は九人兄弟姉妹である。)

省一は長崎の地方銀行の万年監査役であるにも関わらず大阪では「頭取」と呼ばれていた。昭和六年「夕刊大阪」には母と叔母が「頭取の娘」と紹介されている。一〇年余り前二〇一五年頃に、従弟の宮地亀三と淀屋橋南詰めの貴金属店尚美堂を訪ねた。老番頭さんみいたな方に声をかけた。「昔、このちよつと西側に父や母や祖父が住んでいた永見家の子供ですが、こ声をかけたら即座に「ああ、永見銀行さんね」と返事をされ、驚いたことだった。(尚美堂では、そのような縁で母の兄永見克也伯父に連れられて筆者と弟健三の結婚指輪を買ったことを思い出した。ダイヤは日綿マニラ支店長をしていた義弟に香港で買ってきて貰った。) また二〇年程前に大阪で或る銀行員OBと話していた時、その人は「地方の十八銀行の大阪手形交換所の登録番号が非常に若い番号であり、何故だろうか」と疑問に思っていた」と話していた。

時代の「タ刊大阪 令嬢巡り」の記事父親省一を「十八銀行頭取」と書いてあるのは「どっこいしょ」である
昭和 6 年(1931)4 月/5 月



米吉郎は長崎本家と連絡をとりつつ諸物資の営業を拡大した。(次号に記述) 淀屋橋南側の自宅は一階に一〇室、二階に九室もあった大きな邸宅である。明治十八年に五代が急逝する迄五代はここにしばしば立寄り腹心達と会談をした、と克也伯父は話していた。

産経新聞「門井慶喜の史々周国」

五代友厚像 鹿兒島県 / 大阪府
「政商の汚名返上 赤心の救世主」

4月22日に門井慶喜氏の五代友厚に関する論考が掲載された。長年五代友厚が政商と汚名を被せられてきたことが最近返上されたことを評価しておられ関係者として御礼を申し上げます。

この五代に対する濡れ衣がどのようにして解明され、そうして2024年度以降順次高校教科書と二冊の岩波辞典が五代に対する評価修正を行ってきたかについて触れておられないことにちよつと寂しさを感じた。次回は是非とも八木孝昌著『新五代友厚伝』(PHP研究所2020年)、同『五代友厚 名誉回復の記録 教科書等記述訂正をめぐる』(たる出版2024年)に依拠して江湖に五代の業績を広めて頂きたいものである。

五代に濡れ衣を被せることとなった誤報の第一報は、明治14年7月26日の「東京横浜毎日新聞」の社説であり、その後今日に至るまでのマスコミも訂正記事を出していない。なお、五大紙が見出しに「赤心」と今回書いたことは戦後産経新聞が初めてではないかと思う。嬉しくなった。

実は2021年に当「Dream 五代塾」を設立するに際して理事長から提示された第一有力候補は「赤心 五代塾」だった。しかしどうしても世間からは右翼団体としか取られないだろう、ということで現在の横文字交じりの名称となったのである。当塾設立一〇周年に際しては若い会員には当塾の名称を「赤心 五代塾」と変更して五代友厚の雄渾な夢の実現を推進して頂きたい。なお、当会の機関紙「Dream 五代塾 Stribun」や名刺のロゴの左上には

●「赤心」継がんーと印刷してある。(曾野豪夫)

Dream 五代塾活動状況

Dream 五代塾セミナーを実施

4月18日(土) 14時

五代友厚の鉦山業「弘成館」の展開をテーマに五代の企業家精神について顕彰・勉強会をすすめた。五代の生涯は常に国益を優先し多くの事業を近代化を計りつつ推進した。五代は藩主島津齊彬の言葉「外国と通商をひらくには、貿易品の第一は金銀なり、農工と鉦山は国の本なり」を生涯念頭に置き、それを生涯継承したと考えられる。

五代は明治4年(1871)10月に大和国吉野郡天川郷の天和(てんな)山を銅の鉦山として購入した。以降次々と鉦山を入手した。鉦山事業は時間の経過からすると、金銀分析所事業が多額の利益をもたらしたので、その資金をもつて鉦山事業を開始したように見える。しかし実は鉦山事業計画があつてそれを実現するために金銀分析所事業を始めたとみるべきである。従い、鉦山事業は五代が実業界に転身してから思いついたものではなく、先に記した斉彬の考えを継承したと考えられる。具現化を計ったのは5年前(1864年)「五代才助上申書」を建議した時と考える。

その後欧州視察を実現、貨幣鑄造所の視察やオルダリー・エッジ(英国)の銅山視察などを体現し、現地から薩摩藩宛に「五代才助献策十八箇条」を手紙に記し送っている。中には①ベルギー商社を設立のこと、②欧州から土質学の達人を招聘し鹿兒島で資源を探索すべきこと、が含まれている。更にはベルギーとの商社条約書を締結し帰国した。以上経緯をたどり五代の実業家としての第一歩は始まった。当時の幣制は混乱し、外交上も大きな問題であった。外商は悪貨・良貨入り混じる日本の幣制に目を付け莫大な利益を上げていた。五代の鉦山経営は天和銅山を買収し、以降次々と買収、開坑を進め、直接経営に当たった鉦山は二十数か所におよんだ。五代は同業へ

の鉦山譲り渡し、あるいは政府直営の鉦山への協力は惜しまなかった。また、五代は大久保を中心とした太い人脈を築いており、鉦山経営の拡大は順調に進み、鉦山王とまでいわれるに至った。

弘成館は明治6年には鉦山事業を統括するために大阪北区堂島に設立。翌年には半田銀山等関東地区進出のため東京京橋築地入船に出張所(東弘成館と称す)を設けた。

経営には、堀孝之、波江野休右衛門・岩瀬公圓・永見米吉郎らの長崎以来の知己、それに久世・九里などの金銀分析所関係、つまり五代軍団がこれにあたった。弘成館は多数の鉦山の維持管理のため近代的経営組織が設けられ、従来の鉦山経営のやり方とはまったく異なるものであった。事務部門の「内部」、鉦山現業の「外部」に分かれ、それぞれの組織下の各課には明文化された職務分掌があつた。又、全般を総合的にチェックする検正課が置かれ、簿記法にもユニークな方法が採用され多くの改革がみられた。(川口建)

第27回五代塾セミナー予定

日時:2026年6月20日(土) 14時~16時(偶数月第3土曜日)
テーマ:五代友厚小伝・第13話
大阪商工会議所・大阪製銅会社等
場所:川口宅 事前申し込み制
会費:1000円(懇親会含む)

編集後記

五代さんは慶応元年ロンドンから薩摩藩宛の十八カ条建言書の中で日本の貿易業の必要性を説いています。本号では図らずも上村・曾野両顧問から前田正名の輸出、兼松房治郎の羊毛輸入についての論考を頂きました。併せて読んで頂くと五代さんの慧眼に感服して頂けると思います。(川口記)

(連絡先:川口建)
・Email:gogoken12345@gmail.com
・Tel:080-4497-5688
・HP:<https://www.dream-godai.com>



大久保利通の「弘成館」扁額書